



お中元に花火を頂戴した。義助なる手持花火だが、五本でなんと三千数百円はするらしい。私の知る花火とは及ぶもつかない高級花火だ。その昔、大井川の島田宿で川止めにあった旅人が花火を楽しんでいたのを見た刀鍛冶が想を得て花火を工夫したのが、このたび頂

花火と刀

佐伯通信

2020年10月(令和2)
第53号
発行
佐伯泰英事務所
担当/光文社
禁・無断転載

戴した花火の起源だった。川止め待ちで無聊をかこつ旅人が暇を過ごすために楽しんでいた花火は、この界隈でとれる赤松の炭、砂鉄、硝石、硫黄などを枯れ葦の管に詰めた素朴なものであったとか。砂鉄と赤松の炭は、島田宿の刀鍛冶にとっても共通の素材だ。そんなわけで駿州島田宿の刀鍛冶による余技の花火の製造が始まったのだ。この高級花火のブランド名の義助は、名刀鍛冶師の名から名付けられた。

うーむ、一本七百元余な！古希をとくに過ぎ

佐伯泰英／近刊のお知らせ

3月 10日	2月 上旬	2021年1月 上旬	11月 10日
『新・吉原裏同心抄』 タイトル未定	『新・酔いどれ小籐次』 『三つ巴』(仮)	『新・居眠り磐音』 『幼なじみ』(仮)	『新・酔いどれ小籐次』 『青田波』

※発売日は予定です。

『居眠り磐音』 【決定版】	11月10日 ①『散華ノ刻』 ②『木槿ノ賦』 12月8日 ③『徒然ノ冬』 ④『湯島ノ罨』 1月 上旬 ⑤『空蟬ノ念』 ⑥『弓張ノ月』 2月 上旬 ⑦『失意ノ方』 ⑧『白鶴ノ紅』
------------------	---

危機に直面した時に

光文社 文庫編集部
『新・吉原裏同心抄』『吉原裏同心抄』
『吉原裏同心』『夏目影二部始末旅』担当

小口 稔

みなさま、『新・吉原裏同心抄 乱癒えず』をお読みいただきありがとうございます。京と吉原、二つの町での物語は、双方に強大な敵が現れ、ますます混沌としてまいりました。これまでは幹次郎を中心に、吉原会所の面々が協力して対処してきたものが、今度はそれぞれが分かれて戦わなくてはならない状況ですが、大黒柱の幹次郎不在の吉原で、嶋村澄乃らの成長が今後の大きなカギになってくるような気がします。

ところで、危機に直面した時こそ人間の本性が現れるというのは本当ですね。なかなか収束の見えない新型コロナウイルス禍に見舞われた世界の現在ですが、こんな時だというのに、世の中のトップと言える人間たちに目先の利益ばかり追求するような人間が多いのは本当に残念なことです。個々の利害などを超越した人類全体の協力と成長なくしてコロナ禍の収束はない、と思います。

そういう意味では本書に描かれる吉原の面々の姿は、自分たちにも重ねて読んでいきたいと思います。頼りにできるものがない状況で何ができるかを考え、周囲の人々を思いやり、その協力を得ながら、自らを成長させて克服していく登場人物たちの姿には、私たちも大いに勇気づけられるのではないのでしょうか。佐伯先生の時代小説を今こそ読みたい、という理由はここにもありそうな気がします。

近刊・作品情報はこちらでもチェックできます。
<http://www.saeki-bunko.jp> 佐伯泰英 ウェブサイト 検索

2020年の「佐伯通信」は、佐伯泰英事務所が(株)文藝春秋、(株)光文社の協力のもと発行します。

たじい様と丸歳の柴犬みかんが、清水の舞台から飛び降りた心算で義助の花火に点火した。
初めて花火を体験するみかん(沼津生まれ、熱海育ち)は、驚くかと思ったが意外に楽しんでいるような気がした。
うちに小さな子どもでもいれば、花火の楽しみ方は大いに違ったかもしれないが、年寄りと飼い犬の豪華の時はあっけなくもななく終わってしまった。頂戴ものでなければ、義助の花火を楽しむことなどなかったらう。

いや、待てよ。川止めの島田宿の旅籠で路銀を気にしながらも素朴な花火に時を過ごす、わけありの男女を設定すれば、なんとなく時代小説の掌編が生まれそうな気がする。
花火の煙にむせながら、そんなことを思案した。無心に花火を堪能する余裕は、われになしかなか？

書き下ろし新作、続々刊行!

新・酔いどれ小籐次

新・居眠り磐音

19 青田波

11月10日刊行(予定)

知恵と剣で姫君の窮地を救え!

第5弾
『幼なじみ』(仮)

2021年1月刊行(予定)
おそめと幸吉、切磋琢磨する修行の日々――

出版社からのお知らせ ● 文庫文庫